

Japanese porcelain found in Manila, Philippines

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/2969

金沢大学考古学研究室 2005 年 4 月 1 日

金大考古 第 48 号

マニラ出土の肥前磁器

野上建紀 Alfredo B.Orogo 田中和彦 洪曉純

1 はじめに

フィリピン近海では沈没船に伴う大量の陶磁器が発見されており、また、陸上の遺跡においても多くの陶磁器の発見が知られている。しかし、これまで肥前磁器の出土について紹介されたことはなかった。また、フィリピン発見の中国磁器についてもこれまで沈没船資料を除けば、明代以前の陶磁器資料について紹介されることは多いものの、清代以後の陶磁器資料について紹介されることは少なく、フィリピン国内における 17～19 世紀の陶磁器流通についても不明な点が多かった。

そこで 2004 年 3 月、肥前磁器の有無の確認を主目的に 17～19 世紀の陶磁器出土状況の調査を行った。

2 マニラ出土の肥前磁器

筆者らはマニラ市内のイントラムロス地区内の遺跡 (Figure.1, Plate.1) から出土した遺物の観察を行った。16 世紀～19 世紀に至る景徳鎮や福建・広東省の磁器が大半を占めるが、その中に肥前磁器 5 点を確認することができた。決して多い数ではないが、マニラ市内遺跡の出土遺物を概観できるほど観察したわけではなく、むしろその一部を垣間見たに過ぎないため、今後、調査を進めればさらに増加することは確かであろうと思う。以下、マニラ出土の肥前磁器をみていく。

Plate.2 は粗製の染付芙蓉手皿である。内面見込みの文様は花鳥文である。肥前では 1650～1670 年代にかけて生産されている (Plate.3)。

Plate.4・6 は染付芙蓉手皿である。内面の文様は花虫文であろうと思う。有田では 1660～1680 年代頃に生産されている (Plate.5・7)。Plate.4 は有田の稗古場窯出土品 (Plate.5) に酷似しており、後に述べるメキシコシティの地下鉄工事の際に出土した染付芙蓉手皿 (Plate.12) と類似する。

Plate.8 は染付皿である。内面に牡丹文を描いている。

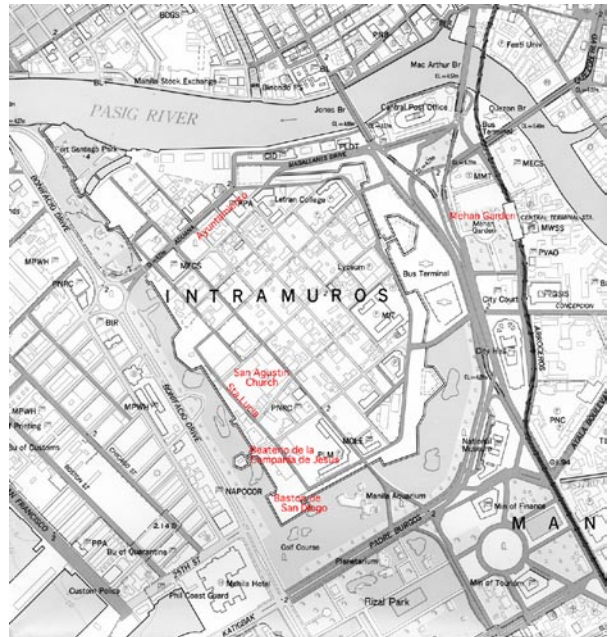


Figure.1 インtramロス地図



Plate.1 インtramロス市街

裏面にハリ支え痕が残る。1670～1690 年代頃に有田で生産されたものと思われる。

Plate.9 は染付皿である。内面の笹葉文（あるいは紅葉文）はコンニャク印判による。裏面にはハリ支え痕を残す。Plate.2, 4, 6, 8 はいずれも海外輸出向け製品と思われるが、Plate.9 は日本国内向けに有田で 17 世紀末～18 世紀初に生産されたものである。

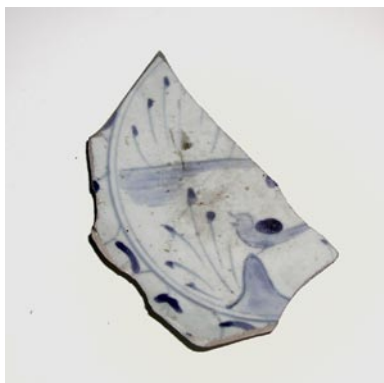


Plate.2 マニラ市内出土染付芙蓉手皿
(Courtesy:National Museum of the Philippines)



Plate.3 有田・外尾山窯跡出土染付芙蓉手皿



Plate.4 マニラ市内出土染付芙蓉手皿
(Courtesy:National Museum of the Philippines)



Plate.5 有田・稗古場窯跡出土染付芙蓉手皿

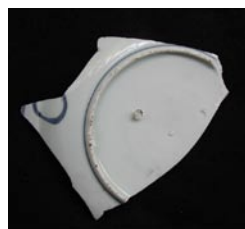


Plate.6 マニラ市内出土染付芙蓉手皿
(Courtesy:National Museum of the Philippines)



Plate.7 有田・中白川窯跡出土染付芙蓉手皿

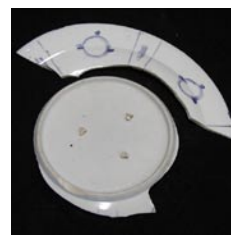


Plate.8 マニラ市内出土染付牡丹文皿
(Courtesy:National Museum of the Philippines)



Plate.9 マニラ市内出土染付竹笹文皿
(Courtesy:National Museum of the Philippines)



確認された肥前磁器の生産年代は17世紀中頃～18世紀初と比較的幅がある。特にPlate.9は清朝が展海令を公布し、輸出を再開した後にもたらされたものと思われる。そして、Plate.2は有田外山諸窯あるいは周辺窯の製品であろう。Plate.4・6は有田製であろうと思われる。また、器形についてはいずれも皿である。器種構成について論じるには量が限られているが、大量に出土している中国磁器もまた概して皿類が多く、皿類が主となる可能性は高い。ただし、マニラ全体あるいはフィリピン全体の出土傾向を示すものではない。イントラムロスはスペインの拠点であり、その遺跡自体の性格が器種構成に反映している可能性があるからである。

3 マニラ出土肥前磁器の流入経路

どのような経路でマニラに肥前磁器がもたらされたのか考えてみる。今回、確認された肥前磁器の生産年代（17世紀中頃～18世紀初）においては、マニラをアジアにおける拠点としていたスペインと日本との間に直接的な交易はなかったとされる。しかし、陶磁器を入手するにあたって、必ずしも生産国まで直接赴く必要はない。すなわち、必ずしも日本と交易関係がなくとも肥前磁器の入手が可能である。スペインは16世紀後半～17世紀前半にかけて中国磁器をメキシコへガレオン船によって運んでいるが、その際、必ずしも中国に直接買付けに行っているわけではない。マニラにもたらされる中国磁器を購入していたのであり、あるいはバンテンなど東南アジアにおける陶磁器の集散地で購入することも可能であった。年代に隔たりはあるが、日本と交易のなかったスウェーデン東インド会社籍の沈没船からも肥前磁器が確認されており、オランダ以外のヨーロッパ諸国の船もまた肥前磁器を入手し、運搬することが可能であることを示している（野上 2003）。

当時、肥前磁器を直接、長崎で入手できるのはオランダ船と唐船であるが、オランダ船がマニラに直接持ち込むことは考えにくく、やはり唐船がマニラに肥前磁器を持ち込む上で重要な役割を果たした可能性が高い。考古資料ではないが、17世紀後半に中国商人とマニラとの交易についてうかがわせる史料もある。フォルカー著の「磁器とオランダ連合東インド会社」（フォルカー 1979-1984）の中の記載や村上直次郎訳註の「バタヴィア城日誌」（村上 1975）にあるマニラ長官の記載である。それによると鄭成功が禁止しているにもかかわらず、ジャンク船が台湾からマニラへ向けて出発していることや数年来、中国の商人が数千金の商品を携えてきていることなどが記されている。問題は中国商人が取り扱っていた商品の種類である。以前より染



Plate.10 キエンザン海域回収染付芙蓉手皿
(courtesy: 故チン・カオ・トゥオン氏)



Plate.11 台南県社内遺跡出土染付芙蓉手皿
(courtesy: 李匡悌・盧泰康両氏)

付見込み荒磯文碗などの東南アジア向けの肥前磁器の輸出の担い手は唐船であり、今回、確認された芙蓉手皿などのヨーロッパ世界向けの輸出の担い手はオランダ船であると漠然と考えられていた。確かに東南アジア向けの唐船の積荷と見なされている鹿児島県の吹上浜採集品の中にヨーロッパ世界向け製品はあまり見られない。しかし、1640年代沈没のハッチャー・ジャンク、17世紀末沈没のコンダオ沈船など唐船と推定される船はヨーロッパ世界向けの製品を多数積載していた。また、ベトナムのキエンザン海域から引き揚げられた肥前の染付芙蓉手皿（Plate.10）についても唐船によって運搬中のものである可能性をもつことから、唐船は東南アジア向けの製品はもちろんのこと染付芙蓉手皿などのヨーロッパ向けの製品も含めて運搬していた可能性が高いと考えた（野上・向井 2000、野上 2002b）。そして、2004年の台湾台南県社内遺跡の発掘調査で染付芙蓉手皿（Plate.11）を含む肥前磁器が新たに発見された（李 2004、野上ほか 2005）。その生産年代は鄭成功によって台湾のオランダ勢力が排除された後である可能性が高い。よって、唐船を介することでマニラに肥前磁器がもたらされる可能性は十分考えられ、その場合、中国沿岸部のアモイ周辺や台湾を経由してもたらされた可能性が高いのである。

4 ガレオン貿易と肥前磁器

これまでガレオン貿易と肥前磁器については、ほとんど論じられることがなかった。マニラをアジア交易の拠点としていたスペインと日本の間に交易が認められていなかったことから直接的な資料に乏しいことがその理由であった。唯一、その関わりを示唆する資料として、メキシコシティの地下鉄工事の際に出土した数点の肥前磁器 (Plate.12) があるが (三杉 1986)、これらの資料はメキシコシティで廃棄されたことを示すのみで、どういった経緯でメキシコにもたらされたものか明らかではない。ヨーロッパに運ばれた肥前磁器が大西洋を横断してもたらされた可能性も考えられるため、必ずしも太平洋を渡った証拠とはならなかったのである。この資料について坂井隆は鄭氏が台湾からマニラに持ち込んだものが太平洋を越えていったと考えたが (大橋・坂井 1994)、やはりこれまでマニラで肥前磁器が確認されていなかったことから、こうした考えも推測の域を出るものではなかった。

今回の発見で少なくともマニラに肥前磁器が持ち込まれていたことは明らかになった。それらがマニラだけで消費されたものか、あるいはガレオン船に積まれるものも含まれていたかという問題については、今後、さらに調査を進めて検討する必要があるが、今回の調査で確認した資料の中にメキシコシティで出土した肥前磁器と同種のものが含まれていることは、ガレオン交易による運搬を強く示唆するものであろう。

5 今後の課題

ガレオン交易と肥前磁器の関わりをさぐることはかねてより研究課題の一つであった。今回、ガレオン交易のアジア側の起点であるマニラで肥前磁器を確認することができたが、調査はまだ十分なものではない。ガレオン船によって商品として新大陸に運ばれるほどマニラに肥前磁器が入り込んでいたかどうか、あるいはマニラそのものにどのような磁器需要があったのか、など今後の課題は多い。そのためには肥前磁器のみにとどまらず、中国磁器を含めて当時のフィリピンにおける陶磁器全体の流通状況を調べなければならない。

また、フィリピン以外の地域や海域の調査も必要である。アメリカ大陸西海岸ではガレオン船によって運ばれたと推定される中国製の芙蓉手皿が確認されている。アメリカ大陸西海岸で肥前磁器が発見されれば、ガレオン船によって肥前磁器が運ばれた可能性は高くなる。あるいはサイパン島など太平洋の島々でもスペイン船の沈没船は確認されており、そうした沈没船の中に肥前磁器が含まれるかどうかを確認しなければならない。さらにアメリカ大陸からヨーロッパへと運ば



Plate.12 メキシコシティ出土染付芙蓉手皿
(三杉 1986 より転載)

れたものもあったかどうかとも重要である。そのためにはメキシコを出発してカリブ海などで沈没した船の陶磁器を調査する必要がある。その意味ではようやく研究の端緒に着いたばかりとも言えよう。

謝意

今回の論考を書くにあたり、以下の方と機関のご協力を得た。芳名を記して謝意としたい。

西田貞子、Mr. Cecilio G. Salcedo (フィリピン国立博物館副館長)、Wilfredo P. Ronquillo (フィリピン国立博物館考古部長)、フィリピン国立博物館考古部、西田記念東洋陶磁史研究助成基金 (順不同・敬称略)

今回の調査は平成 15 年度西田記念東洋陶磁史研究助成を受けて行ったものである。

《参考文献・引用文献》

- 大橋康二・坂井隆 1994 『アジアの海と伊万里』 新人物往来社
- 佐賀県立九州陶磁文化館 1990 『海を渡った肥前のやきもの展』
- 野上建紀 2002a 「海外輸出された肥前磁器」『近世日越交流史』 柏書房 p317-331
- 野上建紀 2002b 『近世肥前窯業生産機構論』
- 野上建紀 2003 「沈船資料にみる肥前磁器の流通」『わたつみのタイムカプセル』 九州・沖縄水中考古学協会 p8-11
- 野上建紀・向井瓦 2000 「東南アジア周辺の沈船遺跡」『日本貿易陶磁研究会第 21 回研究集会資料集』
- 野上建紀・李匡悌・盧泰康・洪曉純 2005 「台南出土の肥前磁器」『金大考古』48 号 金沢大学考古学研究室
- フォルカー 1979-1984 「磁器とオランダ連合東インド会社」 井垣春雄校閲、前田正明・深川栄訳 『陶説』 312-370
- 三杉隆敏 1986 『世界の染付 6』 同朋社出版
- 村上直次郎訳注・中村孝志校注 1975 『バタヴィア城日誌 3』 東洋文庫 271 平凡社
- 山脇悌二郎 1988 「唐・蘭船の伊万里輸出」『有田町史』 商業編 I 有田町史編集委員会 p265-410

Japanese porcelain found in Manila, Philippines

Takenori Nogami, Alfredo B. Orogo,
Kazuhiko Tanaka, Hung Hsiao-Chun

In this article, we intend to give the first report of Japanese porcelain excavated in the Philippines and to discuss the trading route of Japanese porcelain.

Japanese porcelain was exported from Nagasaki in Japan to Southeast Asia between the late 17th century and the middle of the 18th century. It was produced in Hizen area (Hizen is an old name of Saga and Nagasaki Prefectures) and transported by Dutch V.O.C. ships and Chinese junks. It is known that many pieces of Japanese porcelain were found at sites in Vietnam, Thailand, Cambodia, Malaysia and Indonesia. But there was no evidence that Japanese porcelain was exported to the Philippines.

In March, 2004, we researched the sherds of porcelain unearthed at the Intramuros in Manila. They were mainly Chinese porcelain produced between the late 16th century and the 19th century. Among them, Takenori Nogami, one of our research group members found some pieces of Japanese porcelain. The sherds of Japanese porcelain were identified on the basis of the existence of tiny marks of supports at the bottom which most Chinese porcelain did not have. The difference of both porcelain is also recognized by the characteristics of the clay body, which is less shiny in Japanese porcelain than that in Chinese porcelain.

Interestingly, the discovery of Japanese porcelain sherds in March, 2004 supports not only the evidence that Japanese porcelain was imported to Manila but also implies that Japanese porcelain was transported from Manila to Acapulco by Spanish Galleon ships, for one sherd of Japanese porcelain found in the Intramuros is the same type of ware as sherds of a blue and white plate unearthed in Mexico City.

Plate.1: The specimen shown in Plate.1 is a sherd of a blue and white plate with the design of a bird and flowers. It was produced between 1650's and 1670's in Arita, Kyushu, Japan. A specimen(Plate.2) similar to this was excavated in the Hokaoyama(外尾山) kiln site in Arita.

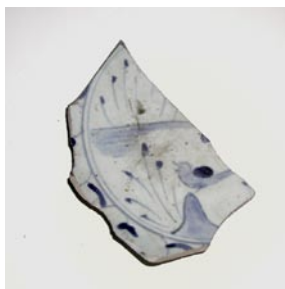


Plate.1



Plate.2

Plate.3: The specimen shown in Plate.3 is a sherd of a blue and white plate with the design of flowers. It was produced between 1660's and 1680's in Arita. It is similar to the sherd excavated in the Hiekoba(稗古場) kiln site in Arita. And it is also the same type of Japanese porcelain as sherds unearthed in Mexico City.

Plate.4: The specimen shown in Plate.4 is a sherd of a blue and white plate with the design of flowers. It was produced between 1660's and 1680's in Arita. The similar sherds were found in the Nakashirakawa(中白川) kiln site in Arita.

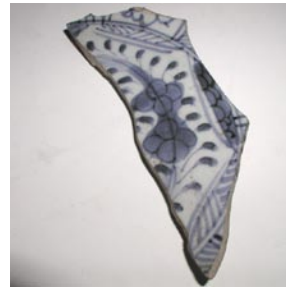


Plate.3



Plate.4

Plate.5: The specimen shown in Plate.5 is a sherd of a blue and white plate with the design of a peony flower. It was produced between 1670's and 1690's in Arita.

Plate.6: The specimen shown in Plate.6 is a sherd of a blue and white plate with the design of bamboos and leaves. The leaves were not drawn with a brush but with a stamp called the "Konnyaku stamp". It was produced between the end of the 17th century and the early 18th century.



Plate.5



Plate.6

Acknowledgement:

We would like to express our deepest gratitude to the following scholars and an institution: Ms. Sadako Nishida, the Nishida Memorial Foundation for the Historical Studies of the Oriental Ceramics; Mr. Cecilio G. Salcedo, Assistant Director of the National Museum of the Philippines; Prof. Wilfredo P. Ronquillo, Chief of the Archaeology Division of the National Museum of the Philippines.

Plates.1,3-6: by courtesy of National museum of the Philippines